

[感想]

今回、作品を通じて感じたのは、「角のすれ」です。

経年による漆の剥落や、櫛の歯のかけやすさとは異なり、角のすれは経年変化や乱雑な使用の影響ではなく、高い頻度での使用の影響でしょうか。（古物としての二次流通中には、乱雑に扱われ面キズが発生することはあっても、角だけが擦れてしまうことはありません。現在の日本人からすると、こうしたすれが気になりますが、江戸～昭和戦前にかけての人たちは、案外気にしなかったのかもしれない。）

すれがどの過程で発生したにしても、大切に扱われたと思われる品物の角がこうした状態となったのは、加工が非常にデリケートで、現在の装身具とは使用性・耐久性の点で大きな違いがあるということを感じました。

講義では、資料を丁寧に読まなくてはいけないことを痛感しました。

講義を受けた後、自宅にもどり手元の書籍をみると、合成ルビーについて、いろいろなことが細かく書かれていました。読み直すまで、これほど細かく書かれていたとは気が付きませんでした。

戦後まもなく出版された書籍には、(専門書でなく)一般向けの書籍であるにもかかわらず、再生ルビーや合成石の問題が、とても詳しくかかれているのは、再生石、合成石のことで非常に苦労されたためか、戦後合成石がブームで一般の関心が高かったためでしょうか。

逆に、最近の本には、ヴェルヌイのことしか書かれていないものがほとんどであるため、ご参考まで一部抄出してみました。お暇があればみてみてください。

以上、取り急ぎ感想のご連絡まで。

[補足]

○帰宅後確認出来たこと 4 点

(1) 桃に配される女性像

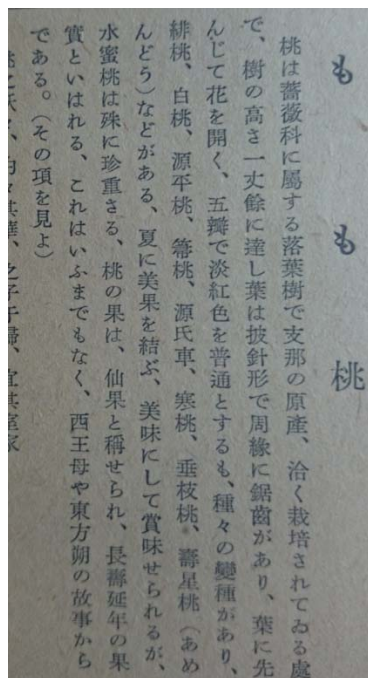
「東洋画題綜覧」から、西王母とするのが正しそうです。

日本画には好んで描かれたようで、「日本画 西王母」として画像検索すると、以下のような画像がたくさん出てきました。謡曲でも親しまれたようです。



一方、弁財天は、桃と一緒に扱われる画題ではないようでした。

※「東洋画題綜覧」抜粋



(2) ウリ科の植物

ウリ、ヘチマ等の植物は、果実とともに描かれる例が多いようです。(「日本画 ウリ」「日本画 ヘチマ」で画像検索した結果)

一方朝顔(ウリ科ではなくヒルガオ科)は、定型的に、○形の中に☆の五角形を入れた形(図案ご参照)で描かれることが多いようです。

櫛での用例は少ないとのことですが、和装(友禅等の図柄、浴衣等)へは、季節の花として好んで取り上げられており、可能性の一つとして朝顔を残しておくのもよさそうです。



(3) ケンドルビー

『宝石百年』を確認してみたところ、3ヶ所(本文 1ヶ所、図表 2ヶ所)で取り上げられていました。

○P332

「明治時代にはまだ伝承的な宝石の呼び名が、そのままわが国でもおこなわれたのは自然のことであつたろう。真正のルビーやサファイア・エメラルドは、あくまでルビーでありサファイア・エメラルドであつて、工人たちの間では、「ルビー」・「サファ」とか「エムロ」などと呼ばれることが普通であつたものの、それはあくまで彼らの間のスラングにすぎなかつた。しかし「ケンド・ルビー」とか「ケープ・ルビー」などというまぎらわしい名称もかなり行われた。

(グレー斜体部分は、文章の意味が通じないので私が補いました／以下同)

⇒「ケンド・ルビー」は、天然石である「ケープ・ルビー」（南アフリカ産パイロープガーネット／近山晶「新訂宝石」1990年 P255）と並列されていること、合成宝石についてはこの次の章（P355 から合成宝石の渡来）で扱われている状況から、以下の【A】か【B】か、と言われれば、恐らく、【A】である可能性が高いと推測されます。

「ケンド・ルビー」	とか	「ケープ・ルビー」
【A】（天然石のフォールスネーム）	とか	（天然石のフォールスネーム）
【B】（天然石のフォールスネーム）	とか	（合成石／再結晶石）

巻末付録には、

○明治時代の指輪（二）※年度未記載		
甲 165 号	18 金トッパーズ	6 円
同	14 金ケンドルビー	7 円
同	同サファ	6 円 50 銭
同	同アレキサンドル	6 円 70 銭
○ダイヤモンド指輪定価表（明治 33 / 1900 年 1 月）		
甲 165 号	18 金トッパーズ	6 円
同	14 金ケンドルビー	7 円
同	14 金ムウンストーン	7 円

などと記載されており、同型(ということはサイズもおおむね同じ?)・同金性のリングの価格帯から、サファイアやムーンストーンと同水準の価格の石であると推定されます。（「アレキサンドル」が何の石か、という問題が発生しますが……）

同時期に製造されていた再結晶石については、「単なる再生ルビーはそれ（ヴェルヌイの合成ルビーの舶来）より早く、すでに明治 20 年代に入っていたが、色が淡きにすぎると、質がもろくて、加工にすら適さないものが多かったので、ほとんど問題にされなかった。」とあり、再結晶石である可能性はあまり高くなく、時期的（ベルヌイの合成ルビーが 1902 年もしくは 1904 年から出現）に合成石でもない可能性が高いと思われます。

もし「ケンド・ルビー」が天然石で、何らかの石に与えられたフォールスネームであるとする、何が考えられるか？ということを考えながら、いくつかの書籍にあたりました（架蔵の書物の範囲ですが）。露木先生がお調べになっても見つからない難物で、当然のことながら決定的なものは見当たりません。

唯一、近山晶「新訂宝石」P 241 に、「カンディ・スピネル」という記述があります。スリランカのカンディ（Kandy、現在の標準的なカタカナ表記はキャンディ）で採掘されるガーネットが、「カンディ・スピネル」と呼ばれたとのこと。

日本語をローマ字表記すると、**Kandi** カンディという音は、**Kendo** ケンドとかなり相似しています。

さらに、ガーネット、スピネル、ルビーの色の類似性を考えると、明治時代には、このガーネットが、「カンディ・スピネル」ではなく、「ケンド・ルビー」と呼ばれたのではないかと想定するのは、あまり突飛ではないかもしれません。

(4) 再製石～合成石にいたる経緯

1950～60 年代に発行された本にある、合成石についての詳細な記述を抄出してみました。

飯田氏の文章を時代順に並べ替え、関連の文章を 3 文字さげで引用しました。

<ゴードン>

【飯田】ルビーの合成で、正式の記録に残されているもっとも最初の実験はマーク・ゴードンによるもので、彼は陶器の坩堝を使い十個近くの微細な結晶を手に入れている。……これは事実上の失敗とみなされている。1869 年になって彼は自身の失敗を認めている。

中村善吉【宝石神秘と伝説】(昭和 33 年/1958 年、P 136)

フランス人のゴードンという人は、1837 年明礬を高温で熔融し、これに着色剤として微量のクロミウムを添加することを試みて、顕微鏡的な大きさではあるが、とにかくその人工合成にはじめて成功した。

<エルスナー／ベットゲル／エーベルメン>

【飯田】言及なし

【宝石神秘と伝説】同

エルスナーとか、ベットゲルとかいう人々がいろいろ研究を試み、やや大きい結晶をえているが、1847 年にはドイツのエーベルメンが硼酸の中でアルミナを溶かすことによって、結晶を得ることに成功

<フレイミーとフェイル>

【飯田】ジュネーバー・ルビーが出現するおよそ 5 年前、フランスのフレイミーとフェイルは陶器の坩堝の中で・・・サファイアの合成に成功している。ゴードンが作ったものとは違い、実に美しいものであったという。・・・それらの結晶群からたくさんの小さなルビーが磨かれ、多くの装身具を飾ったのである。

【宝石神秘と伝説】

1877 年になってフレイミーとフェイルの 2 名の化学者が、とにかく小さいながら琢磨することができるほどの大きさのものを作り出した。

巽忠春【あなたの宝石】(昭和 37/1962 年、P 182～)

1877 年に初めて合成ルビーが現れましたが、このときのものは結晶が小さくて装身具用には不適當でした。そこで工業用に向けられ、時計などに利用されたのです。

<ジュネーバー・ルビー>

【飯田】1882 年頃から多くのルビーが市場に出回り始めた。“ジュネーバー・ルビー”とよばれたそれは、・・・いわゆる『再生ルビー』である。

【あなたの宝石】

1882 年から 1883 年にかけて、ひじょうに大量のルビーが市場に出回ったことがあります。これは、ジュネーブのルビーという名称で、1 キャラット 100 マルクという値段で取引されたのですが、実は、スイス人のワイゼが天然の屑ルビーを溶かし合わせて作ったものだったのです。

<「ジュネーバー・ルビー」以外の再生ルビー>

【飯田】言及なし

中村善吉【宝石神秘と伝説】(昭和 33 年/1958 年、P 136)

天然の小石や細片を集めて、これを溶かした上でやや大形のものを作った。しかしこれはいわばルビーのガラスともいべきものであり、それは再製石 re-constructed stone ではあるが、科学的な合成宝石ではない。その上透明度においても劣るし、色も淡くて貧弱であり、かつ脆かった。1895 年頃フランスのミショーという人が、この方法でかなりの大きさのものを作り出すことに成功して、彼の再製石はフランス、ドイツ、アメリカ、インドなどの市場に現れ、ことにインドでは天然石と混じて売られたことがあったが、今日では再製石はまったくすたれてしまった。

【あなたの宝石】

さらに 1890 年から 1900 年の間に、ふたたび天然ルビーの小片を原料にした人造ルビーが市場に現れました。こんどはジュネーブのルビーなどと、なんとなく天然らしきあやふやな印象の名前を冠せず、正面から「再生ルビー」という商品名で登場しています。再生ルビーは、1892 年頃には 1 キャラット 100 ないし 150 フランで取引されていましたが、1904 年になると、突如、0.3 フランまで暴落してしまったのです。その理由は、1904 年に至って、フランスのベルヌイが層ルビーの再生でない合成ルビーの製造に成功したからでした。

【宝石百年】(昭和 41 / 1966、P335)

単なる再生ルビーの方はそれ (ヴェルヌイ合成ルビー) より早く、すでに明治 20 年代 (1887~1897) に入っていたが、色が淡きにすぎると、質がもろくて、加工にすら適さないものが多かったの、ほとんど問題にされなかった。また形も小さいものばかりであった。

<ベルヌイ>

【飯田】ベルヌイがフェイルの代わりにフレミーの共同研究者になって研究は大いに発展し、ベルヌイは独自の合成方法を 1902 年に発表することになる。…火炎溶融バーナーである。

【宝石神秘と伝説】

商業的に充分採算のいく画期的な合成法を完成したのは、フランスの化学者ヴェルヌイで、彼はこれを 1902 年に発表した。

【宝石百年】

フランスのヴェルヌイが、天然ルビーと同一成分、同様な諸性質を具えたルビーを人工的に合成し、これを商業上の軌道に載せることに成功したのは…1894 年(明治 27 年) (誤記?他資料では合成成功が 1902 年 / 明治 35 年のため、商業上の軌道に載るのは恐らく 1904 年 / 明治 37 年) のことであった。そしておそらく明治 30 年 (1897 年) 前後には、はやくも日本に入ってきたことであつたろう。

【宝石百年】(P63)

シンセティックの色石で、一番最初に日本に来たのはルビーで…知らないから天然石とばかり思い込んで買ったのです。…私もそのルビーを買って…博覧会に出したら宮内省御用になっちゃって、今でも恐縮している。

以上